植物標本の保存と活用 ー植物資料の保管を考えるー

石沢　進

自然環境を大切に後世に受け継ぐことの必要性は、多くの方々にご理解が得られてきていると推察している。自然環境の大切さ・重要性を知るには、過去の状況を把握する必要がある。自然環境は、不動のものではなく、時代と共に変わり、変動している。近年の気候の急激な変動が取り沙汰され、地球温暖化の傾向が指摘されたりしている。自然環境の構成メンバーの動植物にも無縁でなく、絶滅危惧種が増加している。このような状況の中で、今後の環境の変化の解析に欠かせないのが、過去に蓄積された資料の保管であり、それを活用することによって具体的な変動の実態を知ることができ、今後の対策に反映させることもできる。

ここでは、蓄積された資料に関連することを掲載し、大方のご理解を頂きたい。

●植物資料の流出防止

国外にでた場合、植物の研究のために後の人達は、わざわざ標本を所蔵してある標本室まで訪ねていかなければならない。(莫大な費用と時間がかかる。)

地方の植物誌の研究資料は、その採集地の近くの都市に保管することが望ましい。

●植物相の基本台帳となる標本の蓄積

学問の進歩により分類群が再検討されると、種の取扱が変わる。その時記録の基盤になった標本がないと、比較検討ができないことになる。何時でもみれるように資料を保管して置くことが重要である。

●植物の変異を探る資料の蓄積

個体ごとに形態が異るので、種ごとに標本が多数あることが望ましく、変異の幅を示す資料の蓄積は重要である。個体変異を示す重複標本は散逸しないように保管が必要である。

●植物の歴史資料

植物の標本も考古学のおける発掘資料と同じような意義を持っている。つまり、採集された植物の標本は、その採集時に生存していた地球上の実在を示す歴史的な資料でもある。

特に、池上標本の保存にあたっては、以下の特色を生かしておくことが、肝要であり、標本の散逸は避けて頂きたい。

池上先生の植物標本およびその整理上の特色
ー保管にあたって留意すべき点ー

[特　色]

標本番号：採集順に番号を付す
(例) 登山道沿いに下から上への順
正確な採集地の位置の明示（再調査の手引として役立つ）
生育地における種の組合せを知る上に役立つ

標本枚数：個体変異を考慮した資料として一個体から何枚か採集したものもある
(保存に当っては重複標本を散逸させてしまうとその価値を失う)
生長段階を知る資料として花や果実の有るもの、無いものそれぞれ採集
形や大きさを追求する資料として同一植物から多くの標本採集
(特定地域での最大葉の標本、また奇形、変形の標本を集める)

台紙上の位置：標本作成の過程で台紙貼付けの位置を考慮してある。
(新聞紙に挟んである標本の置き方は、台紙貼付ける際の位置を示しており、台紙に貼付けしない作業で標本を移動することはさける)

木本標本の切り口：台紙貼付けた場合、斜めの切口断面が観察可能なようにしてある

ラベル貼付位置：標本左下に貼付ける（右ききの人には標本検索に便利)

正基準標本（タイプ標本)、産地標本：
植物の命名のもとになった標本を含む。(これらの標本は公的な機関で保管することが義務づけられている)

[保　管]（ここでは項目のみ掲載)

●一括保存［池上標本]：
特定の意図で個人が収集した標本は、一括して保管す

る必要がある。（図書館に００文庫として保管されていると類似した意味がある。）

●公認された施設に保管

法のもとに監督、補助を受けるような公的機関でないと、永久保存は不可能に近い。

●空調・冷房装置の完備した保管室

防湿

●防虫、防菌の徹底

虫や菌に知識のある専門家が必要

●基礎備品の整備

拡大鏡、顕微鏡、計測機器、地図

●植物に関連する標本以外の資料の保管

[図書の保管]

標本と図書は、一体であって切り離しての管理は価値を失う。植物の分類や所属の検討には標本も必要であるが、関連する文献を座右において行う必要があり、標本と図書とが照合できるような態勢でなければならない。標本室と図書室を隣接するように整備しておかないと、標本も図書もその価値を失う。標本と切り離して図書だけを図書館に移して保管することは避けなければならない。

（日刊）新潟日報　2004年(平成16年)9月16日（木曜日）

NEWSファイル

池上標本 受け皿どこへ

新潟 合併で資料館構想立ち消え 「保存、活用探りたい」

最大規模の植物37万点

新潟市の植物学者で、元高校教諭の故池上義信さん（一九一〇―二〇〇二年）が、二十年前に寄贈した植物標本約三十七万点を保存する市植物資料室（北部総合コミュニティセンター内）の移転・拡充構想が、市植物園計画の見直しの影響で宙に浮いている。市は二〇一〇年代前半までに鳥屋野潟南部に植物園を建設し、「池上標本」を生かした資料館を併設する方針を一度は示したが、今年四月、広域合併の進展などを理由に計画を大幅に変更。植物園ではなく、農業支援に特化した「（仮称）市総合農業センター」として建設することになり、資料館が計画から消えたためだ。

（報道部・黒島亮）

池上標本は、県内を中心に採集した、種子・シダ植物約二十万点と、コケ類約十七万点で構成され、積雪地域の標本としては全国最大規模のコレクションという。ミズニラなど、今では県内からは絶滅した品種も含まれる貴重な資料だ。

市は一九八四年、標本の受納に合わせ、資料室を開設した。現在は海外からも研究者が訪れている。

資料室は整理用のスペースを合わせても二百五十平方メートルしかなく、紙に挟んだ標本を縦置きし、所狭しと並べている状態だ。かといって、温度や湿度を一定に保たなければ品質を維持できないため、他施設の空きスペースをそのまま資料室に転用することはできない。

九〇年代に入ると、県内の植物研究、愛好者でつくる「植物同好じねんじょ会」メンバーらが母体となった「新潟市立新潟植物資料館整備・促進の会」が、市に陳情書を出すなど活動し、施設建設のほか、専任職員の充実などを求めてきた。

九〇年代後半になると、市園芸センター（石山二）の移転、拡充構想が持ち上がり、資料館を含む市植物園建設の方向性が示された。

同会メンバーで、六〇年代から池上さんと採集活動に取り組んできた石沢進さん(六七)＝新津市文化振興財団植物文化アドバイザー＝は「開設が濃厚になり、要望活動の目的は達成されると思った」と振り返る。

しかし広域合併で農地が格段に拡大することや、新津市の県立植物園との競合が考えられるとして、二〇〇三年八月、市公共事業再評価有識者会議は、市植物園計画を「見直し、または再検討するべきだ」と判断した。

七月二十九日には池上さんの三回忌が過ぎた。石沢さんは「池上先生が元気なうちに、立派な資料館を見せたかった。自然保護が広くうたわれている今こそ、地元の植物を研究する上で貴重な池上標本を生かすべきだ」と訴える。

同会では引き続き、池上標本に石沢さんらが採集した標本も加えるほか、文献や写真も収蔵できる資料館の開設を求めていくことにしている。

資料室を管理運営する市総合教育センターでは「一般向けの資料ではないが、研究のため、また新潟の誇りとしても極めて貴重であり、よりよい保存、活用方法を探りたい」としている。

所狭しと保存されている池上標本＝新潟市植物資料室